

| | |
|-------------|---|
| Title | 99年度岩本ゼミ活動報告 |
| Author(s) | 丸山, 洋平 |
| Citation | 岩本ゼミナール機関誌 (1999), 4: 90-92 |
| Issue Date | 1999-03-24 |
| URL | http://hdl.handle.net/2433/56874 |
| Right | |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | publisher |

99年度岩本ゼミ活動報告

文責 丸山洋平

本年度のゼミは、先生がイギリスに行かれて岩本ゼミ生は本山ゼミに吸収されるという憶測が飛び交う中、なんとか無事に始まりました。インゼミについては、今までの関学、高経、神大・同志社（今年は不参加）に加えて、阪大の阿部ゼミともすることになり、インゼミ中心に一年間が過ぎました。また、岩本先生が10月に、教授になられるというおめでたいこともあった年でもありました。以下、本年度の活動を簡単に記していきます。

4月3～5日 春合宿

99年度の春合宿は去年と同じくまたもや金沢、そして宿も去年と同じく兼六荘でした。勉強内容は、前期で学ぶ国際マクロ経済学、国際金融の基礎知識を身に付けるための文献を選んで読んだが、淡々と発表が進むだけという形になってしまった。

勉強以外の時間は、本年度の3回生の得意分野である。大いに楽しめたように思われる。先生お気に入りの居酒屋「一力」では大いに騒ぎ、2回生を多少戸惑わせたかもしれないが、これから一年間やっていく為に必要なチームワークの土台は築くことができたように思われた。

{合宿用文献：吉川元忠『マネー敗戦』（文芸春秋）、岩田規久男『国際金融入門』（岩波新書）、山本英治『国際通貨システム』（岩波書店）、伊藤光晴著『「経済政策」はこれでよいのか』（岩波書店）}

※時間の都合でできなかった『国際通貨システム』の7、8、9章は前期の最初の時間に行なうこととなった。

前期

今年も前期はインゼミのための基本的な知識を身に付けることに時間を費やした。教科書として、クルーグマン・オブズフェルド共著『国際経済 理論と政策 II 国際マクロ経済学』（新世社）を使用して、班ごとに毎週発表という形式だったが、予習が不徹底だったせいか、活発な討論に発展することは少なく、先生のコメントだけで終わってしまうケースが多かった。詳細な日程と内容は以下の通り。

| | |
|-------|---|
| 4月13日 | 『国際通貨システム』つづき ドル本位制から三極通貨体制へ ドル・マルク・円の現状 |
| 4月20日 | 国民所得勘定と国際収支 |
| 4月27日 | 為替レートと外国為替市場：アセット・アプローチ |
| 5月11日 | 為替、利子率、為替レート |
| 5月18日 | 長期における物価水準と為替レート |
| 5月25日 | 短期における生産量と為替レート |
| 6月1日 | 固定為替レートと外国為替介入 |
| 6月8日 | 前回の補論 国際収支のマネタリー・アプローチ等 |
| 6月15日 | 国際通貨制度 1870～1973年 |
| 6月22日 | 変動為替レート下のマクロ経済政策および協調 |
| 6月29日 | 最適通貨圏とヨーロッパの経験 |
| 7月6日 | 世界的規模の資本市場：その実績と政策課題 |

9月5～7日 夏合宿

夏合宿については高経との合同合宿案や海外（ソウル）合宿案等さまざまな意見が飛び交ったが、結局琵琶湖畔のKKR琵琶湖ホテルに決定した。合宿前に対高経、神大の『円の国際化』班（以下円班）と対関学、阪大の『貿易』班に分け、班ごとに参考文献を自由に選んでプレゼンを行なうことにした。円班は、関志雄著『円圏の経済学』（日本経済新聞社）、益田安良著『ユーロと円』（日本評論社）を分担してプレゼンし、貿易班は一人ずつ貿易に関したテーマについてプレゼンを行なった。自分の班の内容についての理解・意識は高かったが、他の班の発表は聞くだけという形になってしまった。遊びのほうは、自由時間は雨が降って不調に終わったが、お酒の方はホテルのロビーまでわいわいがやがや夜遅くまで続き、絶好調だった。

後期

今年度はインゼミ対策は通常ゼミでは行なわない予定だったが、テキストが終わった後、円班（円の国際化というテーマでディベートは難しくなったので円の国際化班は名ばかりになっていた）と貿易班が交互にプレゼンをすることになった。昨年よりも一校相手が増えたこともあって、10月半ばから12月の半ばまで研究室はほぼ毎日（直前は昼も夜も）どこかの班が使っていて、参考書やら資料やらが山積みの状態になっていた。本番のディベートの出来具合については個々人の満足度は違いうだろうが、研究室で行なった勉強という過程の面においてはゼミ生みな充実感を持っているのでは、と思われる。インゼミが終わった後には、吉富勝の『日本経済の真実』（東洋経済新聞社）を読んだ。インゼミの日程、参加者は以下のとおり（詳細はインゼミ報告で）。

通常ゼミ

10月5日 発展途上国：債務と安定化と改革
10月12日 旧共産圏諸国の国際経済問題
10月19日～11月30日 インゼミ対策
12月14日 『日本経済の真実』

インゼミ日程

11月13日 対関学・鈴木ゼミ ディベート
11月26日 対高経・矢野ゼミ ディベート
11月30日 阪大・阿部ゼミ 合同勉強会
12月4日 神大・藤田ゼミ 合同勉強会

参加者

| | | | | | | | | | |
|-----|----|----|----|-----|------|-----|----|---|----|
| 関学班 | 柵山 | 吉川 | 遠藤 | 西丸 | 藤中康 | 藤中智 | 酒井 | 張 | 斉藤 |
| 高経班 | 松下 | 丸山 | 野田 | 舟橋 | サムナン | | | | |
| 阪大班 | 遠藤 | 西丸 | 船橋 | 藤中康 | 藤中智 | | | | |
| 神大班 | 倫伽 | 関根 | 米崎 | 秋山 | | | | | |

本年度ゼミ総括

一年間のゼミを通じて感じたことは、欠席者が目立つと言うことは少なかったが、遅刻する者が多かったということ。ゼミが始まってからそろそろと入ってくるというケースが多かった。このような状態はゼミ自体にだらだらとした雰囲気をもたらしてしまうので、来年度は定刻通りにみなが集まって始められるように徹底してほしい。また、ゼミの内容については、誰かが発表して先生がコメントして終わりというのではなく、ゼミ生からの積極的な質問、発言を増やしてゼミを活性化し、少人数で勉強できるゼミのメリットを最大限に活かしてほしいと思う。そのためには、自分が担当であってもなくてもその日やる分を

読んでくることを徹底することが必要である。

インゼミにおいては、テーマ決定が遅れたりして大変だったが、2回生も3回生もみな積極的にサブゼミにも参加し、統一感をもって4つもあったインゼミをやり遂げることができた。2回生には今年の経験を活かして、来年度のインゼミも充実したものにしてほしい。

次年度のゼミ長は藤中康生君に引き受けてもらうこととなった。今年度の2回生9人と、来年新たに入ってくる10人（1人は現2回生）をひっばって、より活気あるゼミにしてもらいたい。

最後に、私たちをご指導してくださった岩本先生、山本さん、またインゼミで大変お世話になった柴田さん、田中さん、清谷さんに感謝しつつ、締めくくりたいと思う。